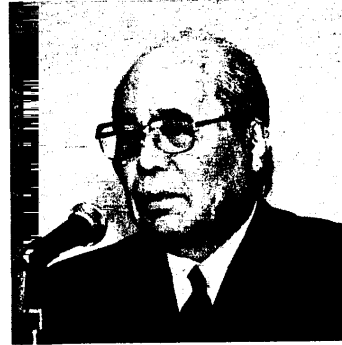


「瀬戸内海に見る村上水軍の歴史的役割」

原 田 八 東

1. はじめに

今日は瀬戸内海と村上水軍という事でお話したいと思いますが、私は何分にも書く方が専門でして、こういう所で話すのはあまり慣れておりません。お聞き苦しい点が多分にあるかと思いますが、その点は約1時間ですからご辛抱をお願いします。



瀬戸内海の航路は、古代に紀氏が開いたといわれています。紀氏の遠祖は武内宿禰といわれており、王朝時代には歌人の紀貫之を出した一族ですが、この紀氏が朝廷において勢力を扶植したのは、瀬戸内海の海上交通で得た収益がものを言ったと言われていいます。降って王朝時代には、遣唐使や遣隋使がこの瀬戸内海を下って彼の地に赴き、また彼の地の文物を携えて瀬戸内海を東上して、わが国に彼の地の文化を伝えたわけです。特に平安朝の貴族文化を支えたのは、瀬戸内海を経由してもたらされた、所謂西国の年貢であったと言っても過言ではありません。このように瀬戸内海は古代から現代にかけて、海上輸送の大動脈としてわが国の経済と文化を支えてきたわけです。今日はその瀬戸内海の中でも、特にその中心部である芸予諸島にスポットを当て、時代を中世にタイムスリップをさせたいと思います。

日本史における中世とは、だいたい鎌倉幕府の成立から江戸幕府が成立するまでの約400年間と理解されていますが、その時代の芸予諸島を語ろうとしますと、どうしても村上水軍という存在を避けて通る事はできないと思います。なぜかと申しますと、歴史語るのに「もし」は無意味ではありますが、もしも村上水軍という存在がなければ、織田信長の中国進攻は少なくとも2年は早くなっていたと思うからです。2年早ければ本能寺の変も起こらなかったでしょうし、従って織田信長が存命しておれば、豊臣秀吉の天下取りもなく、春秋の筆法ではありませんが、日本の歴史は大きく変わっていたと思われるからです。

村上水軍が主に活躍したのは中世の後期、つまり戦国時代が終わろうとしていた頃でした。応仁の乱によって室町幕府の権威が失墜して、日本が群雄割拠の時代に入った頃です。織田信長の畿内統一によって、全国統一のうねりが澎湃として高まり、村上水軍も諸々の秩序とともにその波に呑み込まれて消滅するわけですが、村上水軍の滅亡は、

単に村上氏という瀬戸内にあった一個の豪族が姿を消したというだけでなく、わが国から水軍という独立した海上の勢力が消滅したという、一つの歴史的な意味を持つものとは考えています。村上水軍はある時期の日本の水軍を代表する存在でありましたが、日本の正史には殆どその事は記録されていません。しかし最近になって、郷土史を研究する方々の努力によって、村上水軍というよりは村上氏の有力な武将の系譜、あるいはそうした事跡等はかなり照明が当てられてきています。しかしその村上水軍の歴史的な役割、あるいは存在した意味、後世に与えた影響、またはその村上水軍従に属していた下級兵士の生活とか経済状態とか、そういったものはまだ調査の手がとどいていません。この辺は私たちのような物書きの眼からしますと、歴史上最も重要な部分が欠落しているようにも感じられるのです。また違った見方をしますと、そうであるからこそ、物書きが想像の翼を広げる事ができるという事もあるかと思えます。

ところで今私は便宜上水軍という名称を用いましたが、わが国に中世から近世に至るまで水軍という呼称はありませんでした。現在水軍と呼ばれているのは、海賊あるいは海賊衆の名で呼ばれていました。室町幕府の公文書にも、「村上をして海賊の頭領となす」とはっきり海賊とうたっています。と言いますのは、海賊という語感が現在とはかなり違ってまして、海賊の賊は盗賊の賊ではなく、海の強い者といったニュアンスがあったようです。村上水軍の祖先である村上義弘という人も、自らを海賊大將軍と号しておりました。これで見ても分かりますように、海賊というものが我々が現在考えている泥棒とか反逆者とか、そういった意味合いの存在ではなかったようです。物の本に依りますと、楠木正成も悪党正成と言われていたようです。従って悪党の悪は悪人の悪という意味ではなくて、強い者といったニュアンスが非常に強かったのだらうと思えます。

2. 小説「虹と落日」と村上水軍

私は今ご紹介いただきましたように、「虹と落日」という瀬戸内海を舞台にした村上水軍の事を書きましたが、本来私は中国の古代史に材を取った小説をずっと書いていました。その私が日本の歴史小説を書こうと思った動機は、徳富蘇峰の「近世日本国民史」という本の中に、村上水軍が木津川口の水戦を戦ったという記述が引き金になったわけです。これはほんの数行の記述でしたが、私が知る限りでは郷土史でない史書が、木津川口の水戦を取り上げていたのはこの「近世日本国民史」だけです。私が芸予諸島の出身であるという事も、村上水軍の事を書く一つの要因ではありましたが、それよりも大きかったのは村上水軍が、木津川口の水戦という大きな戦いを戦ったにも関わらず、日本の正史はきわめて冷淡であったということです。戦術的にも川中島の戦いに匹敵するような重要な意味を持つと思われませんが、戦史の研究者も郷土史の研究者もこの木津川口の水戦についてはほとんど沈黙しております。

この木津川口の水戦では、彼我の艦艇約1000隻が同一戦場で決戦したわけですが、こ

これは当時としては世界の戦史にも例を見ない大規模な海戦でした。それが何故日本の正史あるいは戦史の研究家が黙殺したかという点、これは織田と毛利の代理戦争であったという事もありましょうし、また村上水軍が陸上の大名に位置づけると、かなり地位の低い芸予諸島の一豪族にすぎなかったからというような事もあるのではないかと思います。郷土史を研究される方でも、自分の近所で起こった事は非常に詳しく調べていますが、大阪湾で起こったこの木津川口の水戦については殆ど記述されていません。

ところがこの木津川口の水戦に異常な興味を示した人がいました。伊予松山の出身で、明治海軍の天才といわれた秋山真之という参謀がその人です。当時秋山真之は大尉という下級将校でしたが、日露戦争を想定した作戦の立案に当たっていました。如何に能力があっても、30代という若さで、しかも低い地位の者にこういう国家の重大事を預けるといような事は、老朽化した組織の中では到底考えられない事ですが、明治海軍の若い柔軟な頭脳と体質が、この破天荒な人事を行わせたのだと思います。結果から先に申しますと、この人事は凶に当たりまして、日本海の水戦を完全勝利という戦史に例のない形の勝利へ導いたわけですね。

日本海海戦の勝因が、東郷平八郎の敵前回頭によるT字型戦法であった事はあまりにも有名ですが、このT字型戦法を案出したのが他ならぬ秋山真之だったわけですね。秋山真之は対露戦の作戦立案に当たって、古今東西の戦史を研究をしたわけですが、その過程において能島流、つまり村上水軍の能島村上ですが、能島流の兵法書の中にある「やにわに敵の親船を討ち取り候て」という一文に注目し、木津川口の水戦の場合の村上水軍の戦術を徹底的に研究したのです。村上水軍は、魚鱗の陣を好んで用いたといわれています。魚鱗の陣というのは、艦艇を三角形に密集させて、その先端に全力を集中して敵の中央突破を図るといいう戦術です。いかにも戦闘的な陣形にして、この辺りに村上水軍の用兵の性質がよく現れていると思います。これを能島流の兵法書では「全力を以て敵の分力を討つ」と記述しています。秋山真之はこの村上水軍の用兵思想を、近代海戦の場において形にしたという事が言えます。村上水軍は全力を以て敵の一艦を討つ為に、魚鱗の陣形を採ったわけですが、艦艇のスピードと火力が格段に違う近代の海戦で、この形をそのまま持って来ることはできません。秋山真之が村上水軍に学んだのは、味方の全火力を敵の一艦に集中させるという用兵思想だったわけですね。そしてその思想をT字型戦法によって表現したわけにして、その辺りが秋山真之が秀才でなく天才だったと言われる所以だろうと思います。

中世における村上水軍は、確かに日本最強の海上武装集団でした。造船技術、操船技術、海戦のノウハウ、その中のどれを取ってもわが国に村上水軍に比肩し得る水軍はいなかったのです。その時期の村上水軍は、名実ともに海賊大將軍と言ってよかったですと思います。その村上水軍を生み育てたのが芸予諸島の特殊な環境だったのですが、その環境の故に滅亡への道を歩まざるを得なかったところに村上水軍の悲劇があったのですから、運命というのは非常に皮肉なものだなと思います。日本最強の艦隊を村上水軍は持

っていたのに何故滅んだのか、それは指導者が描いた未来像に誤りがあったのか、あるいはまた歴史的必然性だったのか、この辺りは村上水軍の研究家が殆ど触れていないテーマです。それを考察する前に、芸予諸島という特殊な地形が生んだ村上水軍の成立について触れたいと思います。

3. 芸予諸島と村上水軍の成立

村上水軍の始祖は村上三郎左衛門義弘という因島の海賊でした。その義弘の出自については、異説が非常に多くてまだ定説を見るに至っていません。この村上義弘が芸予諸島に蟠居する小海賊の一人で、当時はおそらく伊予の名族である河野氏の影響下にあったものと考えられています。この義弘が歴史の表面に登場してくるのは、武家方と官方が争った建武の争乱の時です。義弘はこのとき官方、つまり南朝側に加担しまして、伊予の豪族である土居氏、徳能氏、また新田義貞の弟脇屋義介と呼応し、芸予の水軍を統一して瀬戸内海の制海権を握ったのです。これによって、海賊大將軍の村上義弘という武將が歴史舞台上に登場するわけです。従ってその時期の村上水軍が、村上水軍前期黄金時代と言え言えると思います。

この村上義弘がいつ死んだか、その死期については異説がありましてはっきりしていません。しかし愛媛県吉海町の広竜寺の記録では、観応元年（1350年）享年55歳というふうに記録されています。この芸予の小海賊だった村上氏を、日本を代表する水軍にまで育て上げたのは、確かに村上義弘という一個の英雄の力でした。従いましてこの義弘が死んだ事が、芸予水軍に与えた衝撃は非常に大きかったと思われれます。そしてその衝撃が鎮静化すると、義弘に男児がいなかったので、村上氏の跡目あるいは芸予水軍の統率を巡って、村上氏の有力な武將が反目するようになったのです。従ってその時期の村上水軍は、形はあっても内部はがたがたでして、まさに崩壊寸前と言ってよい状態であったろうと思われれます。

こうした芸予水軍の動揺を憂慮したのが、南朝の柱石と言われた北畠親房でした。私どもの年代の者は小学校の時に北畠親房は「神皇正統紀」の著者というふうに教えられております。私も北畠親房は清廉な学者というような先入観を持っていました。しかしいろいろ調べてみますと、彼はそんな学者というようなタイプでなく、非常に強かな策士ではなかったかというふうに思われれます。つまり悪く言えば煮ても焼いても食えないような男だったと思うのですが、そういう人間だからこそ倒れかかっていた南朝を支えていたとも言える事もできましょう。北畠親房はその時に伊予に駐留していた新田義貞の弟脇屋義介と図って、自分の孫の顕成を能島城に入れて、芸予水軍の動揺を吸収しようとしたわけです。顕成は自分の所領である紀州の雑賀から30艘の兵船を率いて出撃し、「陰徳太平記」という書物によりますと、途中で塩飽諸島の塩飽三郎光守という海賊を下して傘下に入れ、また更に備中の海賊を吸収して大船団を編成して伊予に向かったと

記録されています。時にこの顕成は23歳という若さでした。

しかし芸予の水軍がこれをすんなり受け入れたわけではありません。余所から来た者が、自分の大将になるという事は誰でもあまり好ましい事ではありません。特にこれに反対したのが、村上義弘の姉婿である今岡通任という武将でした。この今岡通任は顕成の能島入りを実力で阻止しようとして因島まで兵を進めましたが、しかし手兵が何分にも少なくついに戦いに破れ、大三島の尼崎まで退いてしまいました。これによって顕成は辛うじて能島入りを果たしたと言われています。しかし23歳という若さでとにかく水軍の名門である村上氏を横領したのですから、この顕成という人物もなかなかどうして尋常な人間ではなかったように思われます。顕成は能島に入城すると、名を村上師清と改めます。北島の姓のままでは芸予の水軍を慰撫する事がなかなか出来ないと判断したものだと思われませんが、これは賢明な選択であったと思われます。そして顕成は能島に入ると大三島の越智氏、これは現在の大山祇神社の越智氏ですが、この大山祇神社は、当時非常に有力な水軍を持っていて、芸予の水軍の中では突出した存在でしたから、顕成、つまり師清が村上水軍の頭領としての地位を維持しようとするれば、大三島の越智氏を敵にまわしてはいけなかったのです。それと同時に顕成は、河野氏にもよしみを通じたのです。河野氏は往年の勢力はないにしても、国造（くにのみやつこ）の後裔であるという非常に古い由緒を持っていて、伊予の名族と言われていました。師清このように土地の豪族と宜を結び、そして芸予の水軍に対しては恫喝と懐柔をもって徐々に再編成をしていったわけです。その辺りが村上師清が村上水軍の中興の祖と言われる所以であろうと思われます。

師清の子の義頭は、河野氏から妻を迎えて3子をもうけました。父師清の意志によって長男の雅房を能島城に、次男の吉豊を因島の青影城に、3男の吉房を来島海峡にある来島城に入れて、ここで村上家が三家に分立したわけです。従いまして、この時の村上には能島が本家であり、この能島を中心に因島・来島が結束して外敵に当たるといった形であったと思います。こうして一枚岩の結束を見せていた村上水軍も、やがて内部分裂を起こすようになりますが、これは戦国時代の末期まで待たなければなりません。村上水軍を別名三島水軍と呼ぶのは、以上のような理由からであります。

4. 村上水軍とその収入源

陸上の大名は農民から徴収する年貢が収入源で、それによって家臣団を養い軍備を増強整備したが、村上水軍の財源はこの瀬戸内を通行する船の通行税と水先案内料でした。この通行税は帆別銭・櫓別銭と称していました。帆別船というのは帆船の帆と別々の別に銭ですが、私はこれを「はんべつせん」と読むと思っていましたら、先日テレビを見ていると、「ほべつせん」と重箱読みにしていますが、どちらが正しいのか私にはよく分かりません。この帆別船というのは帆の大きさに応じて、櫓別船というのは櫓の

数に応じて通行税を徴収したわけです。そして水先案内料は、水先案内をしてそれで案内料を取ると同時に、航行の安全を保証したのです。村上水軍が発行する切符を持っていれば、瀬戸内海を安全に通行できるという仕組みだったようです。

徴収する通行料は、積み荷の約1割に当たったと言われていいますから、通行料としては非常に高いものだったという事ができます。しかしこれは村上水軍が勝手にやったものではなく、官許といえるものでした。応永元年（1402年）に將軍足利義満から、能島村上をして海賊の頭領となし、遣明船の護衛と倭寇の取締りに当たさせたというような公文書が残っています。つまり村上水軍が瀬戸内海の通行税を取れるようになったのは、遣明船の護衛あるいは倭寇の取締りをやって得た代償で、公認のものであったわけです。従って例えば西国の荘園から米を積んだ船が京都に登ったとしても、それは例外ではなくやはり積み荷の1割程度の通行税を徴収したわけです。だから当時としてはかなりの額であったと思われます。

義頭に命じて師清が村上を3家に分立させたのは、瀬戸内の通行を厳重に監視にするという事が目的であったように思われます。つまり因島を北の押さえに、能島を中央の備えに、来島を南の守りにするという事ですが、地図を見ればお分かりのように、因島と能島と来島に関所がある限り、村上水軍の目をかすめて瀬戸内を通行するのは不可能に近かったのです。

現在、瀬戸内海は本土と四国に挟まれた海域という事になっていますが、この瀬戸内海という名称がいつ頃から用いられたのか、先程お伺いしましたところ、明治の終わりくらいからというふうに言われていました。広島県の尾道市と愛媛県の今治市を結ぶ線上は、大小の島が踵を接するように連なった叢島地域ですが、ここが村上水軍の故郷である芸予諸島であります。私は小学校の時の小学読本の中に、瀬戸内海の風景を「島かと思えば岬、岬かと思えば島」というふうに書いてあったのを記憶しています。これは確かに芸予諸島の風景であったのではなかろうかと思えます。とにかくこの芸予諸島には大小の島が迷路のように入り組んでいまして、非常に複雑な水路を形成しています。その為はその水路に不案内な者が、この芸予諸島を抜ける事は非常に困難でありました。瀬戸内を抜けるには上乗り、中乗り、下乗りというふうに3つの航路があったそうです。上乗りというのは尾道水道を抜けて行く航路、中乗りというのは芸予諸島の中央部、つまり大三島、伯方島、因島の間を抜けて出る航路、下乗りというのは来島海峡を抜けて出る航路ですが、その中でも最大の難所は中乗りだったといわれています。これは潮流が非常に早い上に暗礁が多いので、地理の分からない船乗りではここを抜けることできないので、ここではどうしても水先案内が必要になったわけです。こういう地形が村上水軍を生み、また育てていった大きな要素になっていたのだらうと思います。

村上水軍が、先に言いました二大特権によって得た収入は、殆ど艦艇の建造に投入したと思われます。応仁の乱によって、村上水軍は日本が群雄割拠の時代に入った頃は、伊予の名族といわれた主家の河野氏をはるかに凌ぐ勢力になっていました。村上水軍は

芸予諸島を本拠地にして、その当時は陸上の勢力とは全く関係のない独立した海上の勢力だったのですが、時代の流れは村上水軍をそのままの事を許さなくなってきました。水軍はその宿命として、農産物の非常に少ない島嶼部しか領有していません。従ってその収入源は、先程も申しあげましたように海上の通行税と水先案内料でした。この通行税が多いとは申しましたが、しかし陸上の大名が農民から徴収する年貢に比べますと、その絶対量に於いてかなりの差があるわけです。それに加えて、応仁の乱以後室町幕府の権威が失墜しますと、今度は西国の年貢を中央に運ぶという事が殆どなくなったのです。西国の守護大名が、中央の荘園を全部自分の領地に組み込んだからです。そういう事情が背景にあって、村上水軍の収入は激減するのですが、それでも規模が小さくて、発展途上にある頃には何とか凌げたわけです。しかし機構が膨張するにつれて、村上水軍がその軍事力と面目を維持する為には、他の勢力圏を自分の版図の中に組み入れざるを得なくなってきたわけです。戦国時代という新しい波が、いくつもの小さな波を吸収しながら、大きなうねりになろうとしていた時代です。

5. 村上水軍と毛利元就

こうして澎湃として高まる新しい波に対抗する為に、村上水軍は当時、山陽・山陰の両道で勢力を伸張させつつあった中国の毛利氏と結ぶこととなります。この同盟は一見賢明な選択のようにも思えますが、結果からみると村上水軍にとっては、これが諸刃の剣であったという事になります。村上水軍が陸上の勢力と結ぶ契機となったのは、天文14年（1555年）10月に毛利元就と守護大名の陶晴賢が中国の支配権をかけて厳島で戦った、いわゆる厳島合戦であります。この戦いによって陶晴賢は戦死し、毛利元就という無名の戦国大名が一躍歴史の正面に躍り出たわけです。この厳島合戦は想定される戦場が海上の小さな島ということもあって、水軍の優劣がそのまま勝敗に繋がるという性質を持っていました。その為村上水軍には陶晴賢からも、毛利方からも合力の要請がありました。しかし、村上水軍はなかなか返事をせず、どちらに付くかその意志を鮮明にしなかったのです。もし迂闊に加担しても、加担した方が負けると、村上一族の滅亡につながるという非常に大事な事だったからです。事実、この時陶晴賢に加担した大島や宇賀島の水軍は、それ以後歴史から姿を消しています。村上水軍がこれは毛利の方が有利であろうという結論を出したのは、出陣する3日前だったと言われています。村上水軍のこの運命をかけた水戦を指示したのは、村上水軍初代の頭領雅房から下って5代目の八郎左衛門武吉でした。この武吉が能島村上の頭領、そして最後の村上水軍の頭領になった事を考えますと、この厳島合戦は非常に暗示的だという気がします。

村上水軍は厳島合戦を契機にして、毛利を自分の運命共同体として考えるようになりますが、しかし直接毛利の宗家と同盟したわけではありません。毛利元就の3男で安芸沼田の荘の小早川家を継いで、毛利軍団の海事面を掌握していた小早川隆景の傘下に入

ったというのが正しいかと思われます。小早川隆景は小早川家を継ぐと、拠点を沼田の荘から竹原に移して水軍を創設するのですが、しかしそれは独自に作戦が出来るというほどのものではなかったのです。海軍の創建に非常に時間と資金を要する事は、今も昔も変わりありません。仮に艦艇が揃ったとしても、搭乗員の操船技術、あるいは海戦のノウハウを習得するには、長い時間をかけて積み上げた経験がどうしても必要だったからです。

明治期の日本海軍が、対露戦を想定した艦隊を編成をするのに10年という歳月を要しています。しかもこれは国家予算の半分近くを軍事費に充当して、尚且つそうであったところに海軍の編成の難しさがありました。各大名が自分の水軍部門を持たず、既存の水軍を自分の傘下に吸収したという事実がそれを物語っていると思います。敵島合戦後毛利は山陽・山陰の両道で急激に勢力を伸長させるわけですが、村上水軍もそれを支援する形で自分の版図を広げていきました。その時期反毛利の勢力の頂点にあったのは、北九州の大友宗麟でした。その為村上水軍は毛利氏の要請を受けて伊予の日振島に進駐して、豊後灘に進出してくる松浦水軍の牽制をしていたわけです。松浦水軍とは松浦半島に蟠居する小海賊の総称で、当時はまつらと読まずにまつら党と言われていました。その松浦水軍も村上水軍が毛利に同盟したと同じような理由で、大友宗麟の傘下に入っていたわけです。ところがやがて中央の情勢が西海に目を向けていた村上水軍を、また東部瀬戸内海に向けさせるようになってきます。と言いますのは、尾張から起こった織田信長が一向一揆の討伐に精力的に動きだしたからです。

6. 織田信長と石山本願寺

織田信長は一向一揆の討伐に大きな兵力をさきながらも、播州方面にも食指を伸ばして、その部将の羽柴秀吉を姫路に駐在させて、虎視たんたと播州の平定を狙っていたのです。こうした信長の動向は備中を以て己の勢力圏の東限とする毛利側の危機感を強く刺激したのです。信長の一向一揆討伐も播州出兵も、中国攻略の前哨戦と見なされるからでした。このような事情が背景にある限り、毛利としてはいかなる犠牲を払っても、一向一揆の拠点である大阪の石山本願寺を支援する必要がありました。もし本願寺という足かせが無くなりますと、本願寺を包囲している5万の織田軍がそれこそなだれを打って中国へ進入してくるからです。

一向一揆の拠点であった大阪の石山本願寺は、現在の大阪城の本丸の辺りにあったと言われています。真宗中興の祖と言われる八世蓮如が、京都山科本願寺の別院として建立したのですが、方14町と言われたその構造物は、仏閣と言うよりはむしろ城砦と言う方が正しかったというふうに伝えられています。本願寺教団は蓮如の頃から次第に政事・軍事の世界に介入していき、全国の門徒組織を背景に経済力と武力を蓄積して、着々と封建領主としての基礎を固めたのです。そして16世紀の半ばになりますと、坊舎を

中心にして寺内町ができ、商工業が盛んになり、あたかも守護大名の城下町といった感を呈するようになりました。この時期の本願寺教団は、まだ門徒に対して一揆制止の方針を示して、一揆を極力抑えていました。と言いますのは、守護大名との摩擦は布教をかならずしも有利としないという事を、これより数年前に起った加賀の一揆などで十分学んでいましたので、極力守護大名との摩擦を避けたわけです。しかしこれはあくまでも一時的な妥協にすぎません。門徒組織の頂点に立って封建領主に変貌していく本願寺教団と、全国制覇を目指している野心家とは到底両立し得ないからであります。

本願寺教団と守護大名との間で眠っていた矛盾は、永禄11年（1568年）に至ってついに目覚める事になります。その年に美濃・尾張を平定した織田信長が流浪の将軍であった足利義昭を奉じて入京し、全国制覇の野望を露骨に見せはじめたからです。こうした信長の動きに、本願寺教団も漸く警戒の眼を向けるようになります。そしてその翌年信長の傀儡であった足利義昭が二条城に入った頃には、本願寺教団が本来の姿である宗教の世界に引き下がらない限り、信長との武力衝突は避けられないといった状態になっていました。その翌年、つまり元亀元年（1570年）の正月に、織田信長が石山本願寺に対して最後通牒とも言うべきものを突きつけるのです。中国攻略の為に大阪に前進基地を作る必要があるので、本願寺に大阪から退去するように要求したのです。事ここに至って本願寺教団も従来の一揆制止の方針を一擲して、中国の毛利、越後の上杉、小田原の北条など、反織田信長勢力と攻守同盟を結び、それと同時に全国の門徒に檄を発して、対信長戦に立ち上がる事を指令したのです。

本願寺と妥協してこの傘の下に入る事によって、守護大名からの圧力を逃れようとしていたいわゆる国人、すなわち在地の小名主たちはこの開戦命令を自己成長の唯一の機会としてとらえたのです。彼らは本願寺擁護の名の下に、仏敵信長誅滅というスローガンを掲げて全国で一斉に蜂起し、織田の侵攻軍に激しく抵抗していきました。しかし寡が衆に勝てないのは兵理の常識でして、次々に新手を投入してくる織田軍団の前に、先ず尾張の長島、次いで越前の一揆が壊滅します。そして天正4年には、最も激しく抵抗していた紀州雑賀の門徒が海陸からする猛攻に耐えかねて屈伏し、遂に石山本願寺は孤城になったわけです。孤立無縁といった状態になった石山本願寺でしたが、山内に籠もった1万5千の門徒の士気は非常に旺盛でした。他に支援する者がいなくなったと言っても、この山内にはまだ1万5千の門徒が、ゆうに3年は戦えるだけの武器・弾薬が備蓄されていましたし、雑賀を脱出した鈴木孫市が3千の鉄砲隊を率いて合流したからです。

この鈴木孫市という人物は、別名雑賀孫市とも言って、歴史の表面ではかなり活躍した人で、私も「虹と落日」という小説の中ではかなり重要な人物として登場させています。当時3千挺の鉄砲は非常に有力な戦力でした。ですからそれ以後の本願寺を支えたのは、雑賀3千の鉄砲集団と言われているほどです。しかし非常に士気が盛んだった本願寺でしたが、天正4年の5月頃になりますと、その士気にかげりが見えるようになっ

てきます。と言いますのは、兵糧が殆ど底をついてきたからです。そしてこのままの状態では、一向一揆最後の拠点である大阪の本願寺も、大阪湾の秋を見ないうちに壊滅することは明らかだったのです。石山本願寺は法主顕如の名を以て、同盟者の上杉・北条・毛利の各大名に救援を依頼するのですが、特に毛利に対しては兵糧の搬入を依頼したわけですから、本願寺としては、小早川隆景が持つ毛利の水軍力に期待したからです。

備中に於いて織田の勢力と境を接する毛利としては、本願寺教団の要請を最大の危機感をもって受けとめたのです。本願寺が5万の織田軍を大阪に釘付けにしているのです。信長は本格的な中国進攻作戦ができなかったのです。もし本願寺が潰れて5万の軍勢が自由になりますと、一挙に毛利の領内を進攻してくる目に見えていたからです。従って毛利としては、いかなる手段を講じても本願寺の抗戦力を持続させる必要があったのです。毛利側は石山本願寺の要請を受けると、1か月足らずで1万5千石の米を調達しました。そしてそれを3百艘の輸送船に積み込んで三田尻の港に待機させて、その船団の護衛を村上水軍に依頼するわけです。毛利側がこの依頼をしたのが、天正4年(1576年)5月下旬だと記録されていますが、この毛利側の敏感な反応に比べますと、毛利の要請を受けた村上水軍の対応は非常に鈍いものでした。鈍いというよりも「承知した」という返事を渋ったのではないかと思われるふしがあります。その間の経緯を証明できる資料はありませんが、しかし毛利の要請が5月下旬、村上水軍の出陣が7月中旬であったところに、その間の事情を推測する手がかりがあるように思われます。

本願寺へ兵糧を搬入するためには、輸送船団を大阪湾の木津川口まで誘導しなければなりません。しかしその時期の大阪湾は、織田信長の傘下に入った熊野水軍によって封鎖されていました。従って村上水軍が先ず大阪湾で熊野水軍と艦隊決戦をして、それを撃破して大阪湾の制海権を手中にしてからでないと、輸送船を木津川に入れる事ができないわけです。しかし村上水軍側には、この海戦に必ず勝てるという保証はなかったのです。

7. 村上水軍と熊野水軍

熊野水軍は志摩の田代から起こった九鬼義孝の海軍部門で、伊勢湾を本拠地にして紀州熊野水軍を吸収し、大阪湾から播磨灘に進出した新興の水軍です。客観的に見て当時の村上水軍は、艦艇の質、兵員の練度、戦闘技術、そのいずれを取っても日本最高のレベルにあったので、熊野水軍に対して村上水軍には、成り上がりの熊野水軍が、といった優越感を持っていたと思います。その村上水軍をして必ず勝てるという保証はないと思わせたのは、熊野水軍の頭領である九鬼義孝の能力でもなければ、またその配下の戦闘技術でもなく、織田信長が熊野水軍に種子島銃を供与しているであろうという一事だったのです。

種子島銃は天文2年（1543年）に種子島に漂着したポルトガル人によって伝えられましたが、弓よりもはるかに射程が長く、また初速が早いので命中率も良く、その破壊力に至っては弓とは格段の相違がありました。しかしこの種子島銃は、渡来以後30年も遠距離攻撃兵器の主流にはなれませんでした。それには二つの大きな理由がありました。その一つは非常に高価だったことです。天正年間には国産化が進んでいまして、渡来当時よりはかなり安くなっていますが、それでも種子島銃一挺の価格は米50石に相当したと言われていています。もう一つの理由は、これは殆ど致命的な弱点ですが、弾丸の装填に時間がかかる事でした。第1弾を発射して2弾を発射するまでに、熟練した者でも約30秒を要したのです。30秒ありますと、種子島銃の射程は約100メートルですから、槍を持った歩兵の突撃隊が殺到してしまいます。その為に種子島銃は歩兵の突撃を阻止できないとされ、遠距離攻撃兵器の主流にはなっていなかったのです。

ところがこの種子島銃の弱点を補って、長所のみを最大限に引き出したのが織田信長だったのです。天才は型を創造し、秀才はそれを踏襲するという言葉が当たっているとすると、織田信長は確かに傭兵の天才だったと言えると思います。天正3年（1575年）6月に、織田信長は愛知県の長篠で甲州の武田勝頼が率いる甲州軍団を迎え撃ちます。しかし甲州軍団の中核を成す騎馬兵団は、長槍刺撃を以て日本最強をうたわれていました。ところが織田信長は騎馬長槍の武田軍団の突撃を阻止する為に、長篠の戦場に3千挺の鉄砲を投入し、これを3段にわけて使いました。いわゆる3段構えの方法です。そうしますと10秒に千挺の鉄砲が火を吹くわけですから、この濃密な弾幕に窒息して、武田の騎馬兵団は血煙を上げて壊滅してしまったのです。そしてこれ以後、日本の軍旅の編成が鉄砲主体の歩兵に変わっていくのです。

この長篠の合戦の顛末は、その翌年には芸予の島々にも伝わっていました。ところが毛利側では本願寺攻略に手を焼いている信長が、そのように十分な鉄砲を熊野水軍に供与できるわけがないと観測をしていたようです。しかし果して毛利側がそう観測したのか、そうではなかったか、村上水軍の腰を上げさせる為に事実をかくしたのか、その辺のところはよく分かっていません。とにかく村上水軍としては、種子島銃は確かに装備はしているであろうが、これが少数であれば勝てるという結論を導き出していたようです。

8. 木津川口の水戦

この種子島銃は長篠の合戦の戦訓が教えているように、集中的に使用して始めて効力発揮するのであって、少数の種子島銃の散発的な攻撃では、小早船という小型の快速舟艇での突撃が、十分可能であろうと村上水軍は判断したわけです。この木津川口の水戦は今から約400年前、即ち天正4年陰暦7月15日の正午前から、織田と毛利の代理戦争という形で行われたのです。この未曾有の艦艇を動員して行われた海戦を兵器の面から

見ますと、熊野水軍の種子島銃と村上水軍の炮烙（ほうろく）の優劣を試す戦いともいえます。

熊野水軍の主兵器は種子島銃であって、村上水軍の主兵器が炮烙であったからです。この炮烙というのは兵員の殺傷用に陸戦で開発したのですが、これは鉄砲の渡来によって火薬の使用が普遍化してから初めて現れた兵器です。素焼きの粘土の壺状の物の中に火薬を詰め、導火線に火をつけて投げる一種の投擲弾ですが、壺が粘土ですから破裂しても大した殺傷効果がなく、陸戦ではあまり応用できなかったのです。ところが村上水軍は、壺を青銅製の物に改めたのです。当時の火薬は黒色火薬で爆発力が少なく、このまま使用すると単に壺が破裂するといった程度になりますので、一旦小さく打ち砕き、これを糊付けして紙を貼り、その上から漆を塗って補強し、導火線を付けて投擲するものです。これは兵員の殺傷と焼夷効果を狙ったものですが、これが狭い船室で爆発すると破片が飛散しますので、恐るべき効果を発揮したといわれています。この炮烙を海戦に用いたのは、記録では村上水軍以外にはありません。

またこの海戦を戦術の面から見ますと、村上水軍は戦術の主題を快速の小型舟艇による肉迫攻撃に置いています。一方熊野水軍の方は、広く横に展開する鶴翼の陣を張って村上水軍を待ち受けたのです。これは鶴が翼を広げたような形になるのでこの名があるのですが、拡翼の陣というのは少数の敵を包囲殲滅させるのに非常に都合が良いとされていました。これに対して村上水軍は魚鱗の陣を張りますが、これは少数を以て敵陣の中央を突破するのに都合がいいといわれています。つまり楯と鉾の関係で、その用い方によって優劣が決まるものだと思います。有名な川中島の合戦の時に、武田信玄が採ったのが鶴翼の陣で、上杉謙信はこの魚鱗の陣で単切な突撃戦法を採ったといわれています。陣型というのは、用いるのは主将の性格によって生きるか死ぬかという事になってきます。この時に於ける村上水軍の小早船の速力は、熊野水軍の予想をはるかに上回るものでしたが、熊野水軍が装備する種子島銃も村上水軍の予想を大幅に上回る数でした。その為村上水軍は突撃の初期に於いてはかなりの犠牲を出しました。先鋒は種子島銃の済射を受けて壊滅するのですが、後続が弾幕をくぐり抜けて舷側下の死角にもぐり込んで炮烙を投げ込んだので、熊野水軍の戦闘艦が次々に燃え上がり、熊野水軍は壊滅的な打撃を受けたのです。もしバックに織田信長がいなければ、おそらく熊野水軍はそのときに消滅したのではないかと、と言われるほどの打撃を受けたわけですね。この事は織田信長の一代記である「信長後記」という本には、織田軍は木津川口で必死に阻止しようとしたが、海賊衆は海陸から火矢炮烙を以て火攻めにしたので遂に破れてしまったと、書いています。この炮烙攻撃が如何に凄まじいものであったかを物語っております。

ここで特筆されるのは、村上水軍の小早船、つまり小型の快速周艇ですが、その速力が熊野水軍の予測をはるかに上回ったのは、村上水軍が螺旋式推進機、つまり今で言うスクリューを装備していたからだと言われていています。この螺旋式推進機を備えたのが、実際にどの程度の効用があったのかは分かりませんが、大三島の大山祇神社にその模型

と図面が残っていますので、その思想があったという事ははっきりしています。世界でも最初に村上水軍がこの螺旋式推進機に着目したわけですが、しかし村上水軍の滅亡と一緒に、この画期的な螺旋式推進機思想も無くなってしまふわけで、非常に残念な事だと思われまふ。この第1次大阪湾進攻作戦に勝利したときが、村上水軍の栄光の頂点でした。従つてこの時が村上水軍の後期の黄金時代という事が言えるかも知れません。

9. 村上水軍の滅亡

天正4年から2年後、つまり天正6年の陰暦11月6日に、村上水軍は再び大阪湾の進攻作戦を發動します。石山本願寺の兵糧が尽きたからです。この海戦は結果から言いますと、前回とは全く逆の展開を見せて、村上水軍はここで再起不能な打撃を受けるのです。この第2次大阪湾進攻作戦の失敗の原因は、一口で言いますと、村上水軍は戦勝に奢つて前の海戦で得た戦訓を生かさなかつたことでした。これに対して織田信長は、前回の海戦の戦訓を徹底的に生かしたのです。

織田信長はこの木津川口の水戦に於いて、熊野水軍の壊滅という非常に高い授業料を払いました。しかしその代償として村上水軍に勝つためには何をすればよいかという事を体験的に学び、それを徹底的に生かしたのです。物事を改善しようとするすると、先ずどこがどのように悪かつたか、それを知る事が非常に大切な事だと思います。つまり自分の悪さ加減を正しく把握することですが、織田信長は大阪湾防衛戦失敗の原因を追求して、数多い悪さの中から最も重要なものを、①艦艇の鈍足、②造船技術の劣節、③戦闘方法の未熟、この3点に絞つたのです。しかしこれは村上水軍が長年培つて育て上げたもので、一朝一夕に追い越す事ができる性質のものではありません。それではどうすればよいのか、この設問に対して信長は、優れた兵器と強固な防護方法という事によって答えたのです。武器の面では種子島銃の増強と、当時ポルトガルから輸入されつづありました大砲の装備です。この大砲は種子島銃の約3倍、すなわち約300メートル余りの射程距離を持っていました。そしてその破壊力至つては、天と地ほどの差があります。当時の砲弾は烙裂弾ではなく、大きな鉄の弾を飛ばすだけのものですが、当たれば帆柱を折りますし、舷側に当たれば大穴を空けます。信長は大砲の破壊に着目したわけですが、つまり織田信長は、大砲の遠距離射撃によって敵の旗艦を撃沈し、指揮系統を麻痺させて、組織的な戦闘が出来なくなつた小型舟艇は種子島銃で各個撃破するという着想でした。

しかしこの大砲への着目もさることながら、織田信長という男の凄さを見せたのは、戦闘艦を鉄板で装甲した事です。前回の海戦における敗戦の原因は、船体を破壊されたのではなく、砲烙によって火事が起つたためですから、燃えない船を造れば村上水軍の砲烙攻撃も恐るに足りないと思つたわけですが、それでは燃えない船を造るにはどうすればよいかという設問に対する答えが、織田信長の思考がいかに柔軟であつ

たかを示しています。その回答というのは、船体を鉄張りにするという破天荒なものでした。現代でこそ鉄で張るという事は簡単ですが、当時は未だ鉱石を精錬して鉄をつくるという技術がありません。河床から砂鉄を採取し、それを木炭で溶解して鉄の地金を作るのですから、非常に高価なだけでなく、必要な時に必要な量が得られなかったのです。従って外国が見えていない人には、船を鉄張りにするなどという事は、まさに荒唐無稽な事だったのです。しかし織田信長は、堺という一見戦術的には無価値に見える所を自分の直轄領にして、そこを通じて外国を見ていたので、日本に鉄が無ければ外国から買えばよいという発想ができたのです。

大砲と種子島銃によって大きな損害を受けながらも、村上水軍の小型舟艇は果敢に突撃を繰り返したのですが、炮烙を投げ込んでも戦闘艦は一向に燃えてくれない。そのうちに種子島銃で狙い撃ちされて全滅したのです。この海戦において村上水軍は、全滅に近い損害を受けたわけです。アメリカのアナポリス海軍兵学校の校訓に「戦略の誤りを戦術で補うことは困難である。戦術の誤りを個人の能力で補う事は更に困難である」というような言葉があります。これを踏まえて考えてみますと、村上水軍は戦略を持たず戦術だけで織田信長の戦略と戦い、そして破れるべくして破れたという事が言えるだろうと思います。村上水軍は艦隊の再建ができないままに、天正13年の豊臣秀吉の四国征伐を迎え、その余波を受けて解体されてしまうのですが、これは戦術を持たなかった者の必然的な悲劇と言えるかもしれません。しかし村上水軍の故郷である芸予諸島に生まれた者に取りましては、ここでさもあらばあれと言いたいところです。芸予諸島の小さな豪族にすぎなかった村上水軍が、天下の織田信長を手こずらせたのですから、それで以て冥ずべしだというのが、村上水軍の後輩にあたる私の感想でございます。